

フリーディスカッション

座長：関西大学化学生命工学部 教授 片倉 啓雄

旭川医科大学 教授 西川 祐司

筑波大学生命領域学際研究センター 講師 岡林 浩嗣

予防倫理	志向倫理
<ul style="list-style-type: none">● ~するべからず● 個人の行動の是非を教える倫理・ 前慣習レベル・ トップダウン・ ルールに従わせる・ 座学中心・ 非難する・ 妥協・二者択一	<ul style="list-style-type: none">● すべきこと為したいこと● プロ(社会人)としての行動を考えさせる倫理・ 脱慣習レベル・ ボトムアップ・ ルールを提案させる・ グループ討議・ 批判(助言)する・ 創造的第三案
志向倫理： オリジナリティ・創造性を重視する科学者・研究者・技術者に必要な倫理	

片倉：お申し込みいただくときに、「気になるキーワードを書いてください」ということで、それを講師3名で見させていただきました。やはり、「どういうふうに教えるのか」ということと、あとは、「効果をどう測定するんですか」というのが圧倒的に多いキーワードでした。本日の主題の一つが、志向倫理なんですね。これはお手元の資料に更にちょっと書き加えたものです。例えばボトムアップというのは、岡林先生もキーワードを出しておられましたし、グループ討議に関しては、西川先生からお話がありました。一つ、予防倫理というのが今までの倫理の、教える倫理なんですね。もちろんこれは必要なんです。これに加えてこれが必要であろうと。予防倫理だけではやはり、これから新しいことをする、研究開発をする世代を育てる上で、予防倫理だけでは不十分であって、自らの行動を律する、自立できる研究者、技術者を育てるためには志向倫理の要素を取り入れるべきであるというふうに思います。どこまで取り入れられるか、それから研究倫理としてどこまでやるのかというのは非常に難しい問題で、岡林先生からもご指摘がありましたが、やはり教養レベルとか、そういうところまで広がらないと、なかなか志向倫理のところまでは広がらないかなと思います。どういう風を持っていこうかと思うのですが、一部、時間配分がまずかったので質問ができなかった部分があるかと思っています。例えば、この中でさらに気になるキーワードがあれば、というご質問でも構いませんので、会場のほうから幾つかご質問をお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。前の方から。

参加者 B：すいません、B 大学医学部の参加者 B と申します。大変貴重なお話ありがとうございました。志向倫理、まさにそのとおりだなと思いますが、私が B 大学で、あるいは公正研究推進協会でも依頼されて、色々なところでお話しするのですが、1 時間しか与えられていないんですね。その 1 時間で志向倫理を果たして教えることができるのかといつも悩みながらやっているのですが、その辺りをアドバイス等頂けたらと思っています。よろしくお願いします。

片倉：はい。これ、私もそうなんです。本日も 50 分なので、言いたいことの半分も言えてないなというのがあります。ただ、志向倫理だけに絞るのであれば、やはり私のスライドでも使いましたが、法律・ルールというのは後追いであると。それに対して、研究者・科学者というのは、まだ誰もできないこと、知らないことをやるのだと。そこに気づいてもらえることが一番大切なことかなと思います。だから、限られた時間であればそこにフォーカスした講演をするべきかなと思います。自戒を込めて。後ろの方。

参加者 C：すいません、C 大学の医学部から来ました参加者 C と申しますが、どうもありがとうございました。志向倫理、予防倫理の方になるかもしれないですが、西川先生のご講演で非常に興味深かったのですが、私も臨床家なものですから、シナリオが非常に興味がありました。聞き漏らしたかもしれないですが、研究倫理の教育される時期というのは、何年生が対象ですか。

西川：2 年生の前期といますか、夏休みを挟んでですね。

参加者 C：仰ったように、リサーチマインドがまだ無い学生にどこまでかというのは私もよく思うのですが、時期というのはかなり大事な。特に医学部の場合ですと、2 年生でやったとしても、卒業して国家試験があって、研修医をやって、また実験から非常に遠ざかってしまうものですから、大学院のほうが良いのかなということも。先ほど、岡林先生は大学院でやってみえられたと思っていますが、学部によって違うのかと思いますが、倫理の教育をする時期も非常に大事なかなと思ってご質問させて頂いたのですが。

西川：そうですね、特に医学部の場合は、学生によっては全く論文一つも見ずに卒業することも可能なカリキュラムになっていますね。それで、一応今までも、講座にカリキュラムの空き時間のような形で配属するというのはあったのですが、その時にある程度講座毎に教育の仕方はいます。研究をやったりするチャンスはあったのですが、そうじゃない学生もかなり多いという現実もありまして、それで研究倫理ということ全員に一度教えたいということがあり 2 年生を選んだわけです。2 年生というのは良い時期かどうかというのは難しいのですが、ちょうど今、解剖とか生理とか病理をやっているような、そういう時代に充ててはいるのですが、そのチャンスしかカリキュラム上無いものから。

参加者 C：恐らく、学生にもかなり、基礎に行く学生もいれば、臨床に行く学生もおります。臨床に行った場合はかなり温度差があるとお聞きします。どうもありがとうございました。

片倉：他にございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

参加者 D：D 医科大学の研究倫理教育責任者で、日々「ゆでがえる」が出ないように苦戦している者です。今のお話も聞いて、ちょっと関連したコメントをさせて頂きたいのです。私は、学部の1年生の倫理学の授業と、大学院の授業で研究倫理とか色々扱っておりますと同時に、研究者に対する倫理教育や企画実施等もしております。その観点で考えますと、やはり学部1年生、特に医学部の1回生というのは、受験に染まっていまして、幾らいろんなボールを投げかけても、問題意識が無いのでなかなかキャッチしてもらえないということで悩んでいます。それで、本学の取り組みとしては、5年次に、実習期間の時に医療倫理の授業をし、もう少し問題意識ができてから、もう一度倫理の問題を繰り返すということをやっています。当然、大学院の授業でも取り上げてやっています。同じテーマを扱うときも、例えば教える側が、今日片倉さん、色々な面白い事例を出していただきましたが、新入生であれば新入生に見合ったような例で授業をするとか、方法論を変えてみるというのも一つの方法だと思っております。

例えば、代返をするとか出席カードを友人のものも出すという行為がやはり出てくるわけですね。それが、授業で説明する大きなスキャンダルとどこが違うのかということや学生にディスカッションさせるような授業をするとかいうことを、1年次の授業では試みたりしております。後、今年度の定期試験で、研究不正とか授業の代返の不正みたいなものがなぜ起きるのか、そしてなぜ起きないようにすべきかという問題を出したら、全員100点をあげたいくらいよく書いているんですね。だから、わかっているんです。なぜいけないかがわかっている、だけれどもやってしまう構造があるということに気づいていると。それでもやはりやっちゃう人がやはり一定数出てくるわけですね。こういう授業をすると多分かなり減るんだろうと思いますが、やはり一定数いるわけですね。そういう人たちがどう扱うのかというのが課題かなと思います。だから、そういう意味でも、やはり志向倫理が重要だなと最近思っています。悪いとわかっているやっちゃう構造があつて、それを止めるためには志向倫理的なものを養成しないと、結局予防倫理の限界がそこにあるんだなということを強く教育する側としては考えております。そういう意味でコメントさせて頂くと同時に、今後のディスカッションでその点もう少し掘り下げていろんな先生のご意見を伺いたいということです。

片倉：ありがとうございました。これに関連して、会場からも是非こういう風に教えるべきではないかという提言とか、そういうものがございましたらお願いいたします。

参加者 E：E 大学の URA の参加者 E と申します。面白いお話ありがとうございました。なぜこういう研究不正が起こるかというところについてのスポットが当たってなくて、そして研究者にこういうことを教える、教えるという観点しかないのが、私は非常に問題だと思うんですね。というのは、若い人たちはどういう研究環境にあるかといったら、雑用が多い中であつて、しかも科研費を取ろうと思つたら、業績論文がなければ通れない。インパクトのあるサイエンス「ネイチャー」などに出そ

うと思うと、あっと驚くようなデータがなければいけない。インパクトを求める雑誌ですから、そういう環境の中であって、しかも国際的な競争になっていますから、日本が一生懸命やっても中国が何かやるかもしれないし。そんなような環境の中にあった時に、踏みとどまれるかという問いに対して何ら救済がなくて、こういう時間を設けて教える、教えるって、どうやって教えたらいいかということに日本は腐心しているということが、何か見当が違っているのではないかという。ですから、例えば JSPS が科研費の採択、非採択を考える時に、業績論文に偏重しないとかそういうことをしていけば、ある意味緩和されていくかもしれないですし、そういう周りの研究環境を何も変えずに、研究者自らがあたかも意識が足りないかのような発想で物を考えるのはいかなものかと思っています。以上です。

片倉：はい。現場でどうするかということと、政策的なことをどう変えていくかということと、両方大切なことであると思います。科研費の申請のときに、業績を書かなくていいようにしようと、そういう科研の申請項目もありますが、一つは研究倫理的な、あるいは教養的な振る舞いに関して時間を取っても評価されないという面がありますね。私も前任校で技術者倫理とか、そういうことを一生懸命やっても何も評価されなかったというのがあります。そういうところを、例えば科研費の申請書の中にそういう活動をしているかどうかを書く項目をつけて頂くとか、例えば、そういうこともコストをかけずにできることの一つかなと思います。ただ、本日はどう教えるか、どう気づかせるかということを中心としておりますので、本日は気づきの方に、申しわけありませんが、焦点を戻させて頂きたいと思います。他に会場から、これだけは言っておきたいということ、ございませんでしょうか。

参加者 A：先ほども質問させていただきました参加者 A と申します。私は実はこの 2、3 年、大学院共通教育で倫理問題をやろうということで始めたのですが、あるところから、ちょっとサイエンティフィックな方の全学のほうで文系と理系と一緒に共通科目なのですが、科学哲学を同時に教えたほうがいいのではないかということで。もちろん科学哲学の専門家とタイアップしながらやっています。まだ、はっきり言って評価はわからないのですが、逆に文系の学生は科学哲学に対する知識というのは結構豊富なんだけれども、理系の人はゼロに近い状況で、そのデータの取り扱い等を含めてやるので、そういうことをこれからも続けていくべきなのではないかと思いつつも、別にしたほうがいいのではないかなと思っています。

片倉：岡林先生、教養部のお話も先生のお話からも出ていましたが、今の会場からのお話に関して、先生のご意見はいかがでしょう。

岡林：まさにおっしゃる通り、科学哲学、意外と理系の学生さんがそういう哲学的なこと についての素養が実際余りない人が多くて、確かに西川さんのお話にもありましたが、理系の学生さんはついつい、クリアカットに何でもかんでも白黒つけたがると。その背景の広さとか、サイエンスとの向き合い方とか。あとは、実験科学というものがそもそもどんなデータも必ず条件付きの正しさで「こ

れこれこの条件からこうでした」ということをただ言っているにすぎないものなのですが、一般の方々はそう出ると「あっ、これはいつもこうで、これが真理なんだ」と思っちゃうという傾向がサイエンスコミュニケーションの分野ではありますよね。

実はそれに近い感覚を、入ったばかりの学生さんが、特に理系の学生さんが意外とナイーブに持っ
てしまっているということの問題点というのは、私も常々感じてはおります。確かに、という意味で。
ただ、具体的にどういう風に組み込んでいったらいいかというところがなかなか難しいのですが、一
応私はどちらかといえば、自分の授業を受けに来る方の大半が理系の学生さんですので、現状やはり、
今言ったような主観と客観、自分の考え自身を第三者的に見ることとか、批判的に見ることとか、ど
くごく基本的なところと。あとは、データの取り扱いに関するところで、理系の場合だったら統計学を
もっとしっかりちゃんと教えるべきだろうという風に思っています、そういう意味で教養レベルで
そういう教材ができないかということ、実は今試してはいるところです。ただ、哲学的な話という
ことをより言っていくと、どこぐらいどこまで深く書くべきかというところは、なかなかわからない
という点が正直あります。

参加者 A: 実は、教えていて思う一言、「哲学問題にはのめり込むな」というのを必ず言っております。

岡林: ありがとうございます。

片倉: 色んな価値を知るということは間違いなく必要なことだと思います。色んな人の意見を知る、
それに同意するしないは別にして、知るということは非常に大切なことなので。先ほど、1年生にど
んなふうに教えるかというのがありました、私の場合は、グループディスカッションさせるように
しています。グループディスカッションも、できれば文系・理系を混ぜたグループディスカッション
がいいと思うのですが、1年生だと自分の意見をはっきり言えない学生が非常に多いです。ですか
ら、そこも仕掛けがしてあって「自分の意見を言えるようにならないと、自分の意見がいつまでたっ
ても洗練されたものにならない。良い批判をしてもらわないと、自分の意見というのは良くなる
意見を書いて失敗して恥かくことよりも、自分が進歩しないことを恐れなさい」と言った上で、グル
ープディスカッションをあえて1年生の間にさせて、自分には考えもつかなかったようないろんな意
見が聞けるというのを体験させる、そんなことをしています。価値の多様性という面から言いますと、
先ほどグレーゾーンというお話がありました、どこで線を引くのかというのは非常に難しい問題な
んです。これに関して一つだけ。

線引き法(1)

1. 類似のケースをいくつか考え、そのうちの2つは、明らかに倫理的に問題があるケースと問題がないケースにしておく。
2. 倫理的問題が大きいものから順に並べ、問題となるケースがどこに位置するかを考える。
3. 周囲の事例と比べて、そのケースが社会的に受け入れ可能であるかを判断する。

ある会社で、納品された品物の検品を担当しているA氏の趣味はゴルフである。休日にゴルフの練習場からの帰りに喫茶店に入ったら、隣のテーブルに偶然、買い物帰りのB氏がいた。B氏は普段からA氏の会社に物品を納入している業者で、やはりゴルフが好きだということで、しばらくゴルフ談義に花を咲かせた。喫茶店を出るとき、B氏はA氏のコーヒー代をまとめて払い、店から領収書もらった。

線引き法(2)

- ① 便宜を図る見返りとして現金をもらった。
 - ② 便宜を期待して料亭で接待してくれた。
 - ③ 昼食をごちそうになった。
 - ④ 事務所で出前のコーヒーを取ってくれた。
プライベートでコーヒーをご馳走になった。
 - ⑤ 事務所でお茶をごちそうになった。
 - ⑥ ハンガーに掛けていたコートをもってきてくれた。
1. あなたが民間企業に勤務している場合
 2. あなたが公務員の場合
 3. あなたは公務員でゴルフはプロ級。スイングのアドバイスをし、感激したB氏はポケットマネーでコーヒー代を払った。
 4. あなたは民間企業に勤務しており、製品の安全の鍵を握る部品の調達・検査を担当している

技術者倫理でどんなふうに行っているかというのがこれなのですが、線引き法というのがあります。ある事例に関して、これがアウトかセーフかというのを判断するときに、それに類似する例を5つか6つ出すんですね。その5つか6つの例のうちの、1つは、明らかにアウトな例、もう1つは明らかにセーフな例にしておきます。例えば、ゴルフで、得意先・納品業者とゴルフの練習帰りに会ってしまって、コーヒーを一緒に飲んだけれども、それを払ってもらったと。これが許されるか否かと。状況によって、許される、許されないの判断、あるいは感じる人によって全部違うんですね。どういうふうに行っていくかというのと、類似の事例をこういう風に、この場合だったら1番から6番まで、例えば見返りとして現金をもらった。これは明らかにアウトでしょうと。それに対して、事務所を訪問した時に、ハンガーにかけたコートを帰るときに取ってもらったと。これはさすがにオーケーでしょうと。プライベートでコーヒーをごちそうになったという先ほどの事例がどこに入るかというのをまず考えてもらうんですね。その上で「どこまであなたはアウトと思いますか。どこからセーフだと思いますか。」と学生に問いかけます。これも様々です。いろんな意見が出てきます。それで良いと思うんですね。あとは、シチュエーションが変わったときにどうなのか。これ全部変わってくるんですね。例えば、公務員であるならば、国家公務員であるならば、国家公務員倫理法の中に、役務の提供はだめというのがあるんですね。そうすると、厳密に言うと6番も役務の提供になるんですね、これ。

例えば、取りにくいコンサートのチケットを取ってもらったって、これアウトなんですね。それと同じといえば同じなんですよ。「ここまでアウトだ」って言う学生も出てくるんですね。「いや、それはないだろう」と言う学生もいて、こういう色々な価値があるということを経験すること自体が、意味があることかなと思います。実際にどこで線を引けるかというのは、これは何かマニュアルで決められるか、あるいは、どこかに文書化できるかというのと、無理だと思うんですね。ですから、こういうときにいかに多様な価値に配慮して、周囲の目とか、そういう批判を配慮して、自分で決断できるかどうかというところを考えるのが一つ方法ではないかなと思います。そういう意味では、グループ討議というのは、非常に多様な価値に触れることができますから、是非色々な手法があると思いま

すので、これは取り入れて頂ければと思います。他、ございませんでしょうか。

予防倫理	志向倫理
<ul style="list-style-type: none">● ~するべからず● 個人の行動の是非を教える倫理・ 前慣習レベル・ トップダウン・ ルールに従わせる・ 座学中心・ 非難する・ 妥協・二者択一	<ul style="list-style-type: none">● すべきこと為したいこと● プロ(社会人)としての行動を考えさせる倫理・ 脱慣習レベル・ ボトムアップ・ ルールを提案させる・ グループ討議・ 批判(助言)する・ 創造的第三案
志向倫理： オリジナリティ・創造性を重視する科学者・研究者・技術者に必要な倫理	

参加者 D：度々すみません、D 医科大学、参加者 D です。志向倫理というのがキーワードになっているかと思いますが、今、グループワークというお話があって、私も志向倫理を教育するためには、グループワークなるチュートリアルリングとか、そういったような参加型のものが不可欠だと思うんですね。ただ、これはかなり労力とコストがかかるもので、研究倫理教育をしないとイケない対象者って、今私の大学は、大学院生とかにも CITI Japan は義務づけていますが、対象者というのは研究者と院生とかも含めると、1,000 人以上になるわけですね。そういう人たちに対して、志向倫理をどのレベルまで、どういうふ風に教えるのかということを考えているのですが、やはりコストと手間と、スタッフィングですね。実際、グループワークをするための人材とか、アレンジメントというのも必要ですし、提供する側の労力というのもすごく重要ですよね。一方的な講演であればそうでもないかもしれませんが、先生もやられたのは、いろんな工夫とか、前段階のアレンジメントをしないと、事前ワークを課すとか、なかなか上手くいかないところもあって、かなり費用がかかると。費用の問題をどう考えるかというのが切実な問題だと思うんですね。今日ここにいらっしゃった責任者の方々というのも、重要性はわかりました。では学内でこれを広げようとした時に、やはり予算措置とスタッフィング、あるいはそういうものを提供する側の教育というのも必要になってきて、今の各大学に研究教育責任者を置きなさいという。私もそうですが、本務があるわけですよ、兼務でやっている。その下へのスタッフィングというのはお金が無いからなかなかしてもらえない、みたいなことがやはりどこの大学でもあるのではないかと考えています。そういったときの、岡林先生のお話では費用対効果という話も出てきましたが、費用対効果をはかるときのはかりというのも、皆さんすごく違うわけですね。意識が高い人は、効果があると。すぐには出ないかもしれないけれども、絶対効果があるという確信を持っている教育者もいるかもしれないけれども、無いと思っている、どうせやっても、たくさんやっても不正を犯す人は犯すよねと思っている教授の先生方も少なくないと思います、正直ですね。

そういった中で、いかに志向倫理教育というのを各機関が独自に広げていけるのかということについて、何か教えなりアドバイスをいただければありがたいというふうに思っております。

ポジティブで能動的な演習

良いところを見る安全巡視

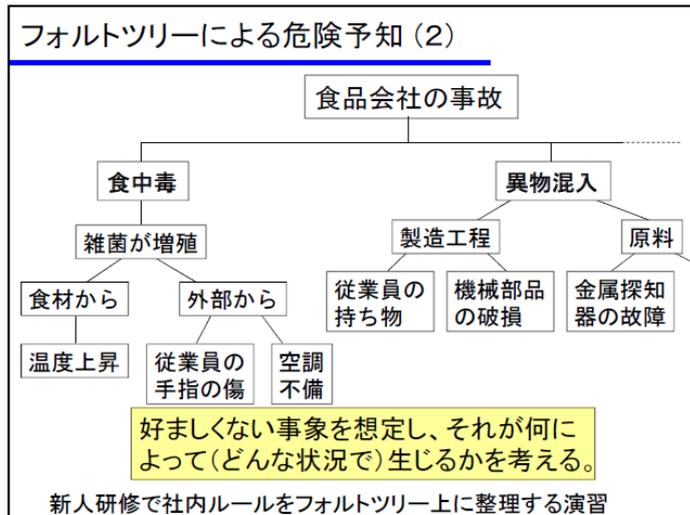
- 1) 研究室で巡視のローテーションをさせる
- 2) 良い工夫を3つ以上見つけた上で不備を指摘する
- 3) 見つけた良い点を報告させる
- 4) 自研究室の不安全箇所を改善し報告させる

社内ルールを提案させる

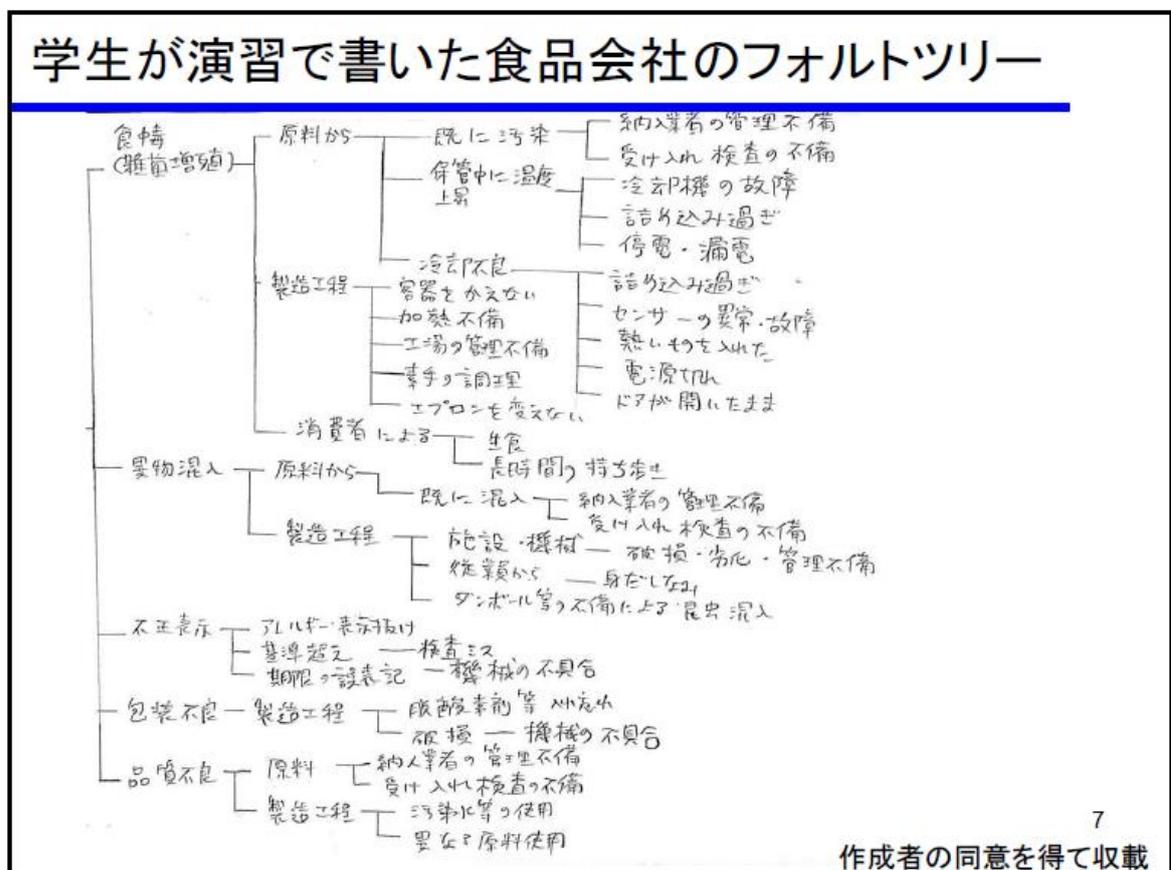
- 1) 同業他社の事故・不祥事を調べさせる
- 2) フォルトツリーを作らせる
- 3) 規格、社内規定・ルールで対応できているか調べさせる
- 4) 対応できていない部分についてルールを提案させる
- 5) 他部署・家族から批判してもらいブラッシュアップする

片倉：非常に重い問題ですが、AMEDさんがそういう教育プログラムに関して、公募して助成をするということをしております。それに関しては、成果が間もなく出てくるでしょうし、メーリングリストでもそういうお話が出てくると思います。あと、ご参考になるかどうかかわからないですが、私がやっている他のやり方ですが、能動的にやるとインタラクティブにやるということで、安全巡視というのをやらせているんですね。「隣の研究室を見てきなさい」と。「悪いところじゃなくて、いいところを見てきなさい」と言います。これは前任校でやっていたのですが、12の研究室があるので、研究室を指定してローテーションして見てこさせます。「隣の研究室のいいところを翌週3つ報告しなさい」というのをやります。

教授会で「こういうことやります」と言ったのですが「悪いところをチェックしに来ます」と言うを受け入れられないと思いますが、「良いところを見に行きますからよろしく」と言うと、すんなり通りました。これをやると、翌週、学生は、12×3で36の良い工夫を見るんですね。すごくポジティブな気持ちになるので、そこですかさず「では、これを踏まえて、自分の研究室の悪い点を改善して、翌週報告してください」という風にやるわけですね。これは実は、指示するだけで、教員は何もしなくていいんですね、授業2コマ分。学生はすごくインタラクティブで、前向きな気持ちになるので、こういう工夫をすると安い効果で行けるかなと、費用対効果もよいかと思います。



企業の場合でしたら、社内ルールを提案させるというのがありますね。フォルトツリーとって、不祥事とか事故を分析するやり方があるんですね。その組織にとって不都合なことを挙げていって、その不都合がどういう状況で生じていくかというのを考えるんですね。これで社内規定とかルールとかが対応できてなかったら、それはまずいねという話になるのですが、これを実際にやらせてみると良いかなと思いますね。



ちょっと学生にもやらせてみました。このツリーをつくるのというのは、経験が無いと難しいので

すが、実はインターネットにデータベースがあります。それを見た上で「ツリーを作ってごらんさない」ってやりますと、学生でもこれぐらい作ってくれるんですね。その上で、会社であれば、ツリーを作ってもらって、社内ルール、どのルールがどれに対応しているかを調べてもらって、「足りない部分を提案してください」という風にやれば、これは間違いなく志向倫理的な演習になると思います。これも教員側としては指示するだけで、それほど負担ではない。グループディスカッションこれももちろん大切ですし、そこに力を注ぐべきだというふうに思いますが、他にも工夫次第でこういうことができるかなと思います。RIO ネットのメーリングリストとかで、こういうアイデアを交換するというふうなことができればいいかなという風に思っています。これで答えになっていますでしょうか。すいません、私、これぐらいのことまでしかちょっとできないのですが。先生方から他に何か。

西川：志向倫理をどうやって教えたらいいかって、本当に私達も難しい問題だと思っはいるのですが、一つの方法としては、やはり良い研究に触れさせるというか、学部学生でも大学院でもいいですが、本当に良い研究に触れさせて、そこでディスカッションするというのが、長い目で見ると一番効果があるのではないかなという気がしています。私達の大学でも、若手の研究者が集まって月1回ぐらい研究発表して、そこで学部学生なんかも参加してというのが少し最近始まってはいます。そういう中で、その研究室の垣根を越えて発表するということが実際可能ですので、お互いにデータを見せ合ってディスカッションして、例えば「仮説がちょっとおかしいのではないか」とか、そのようなディスカッションができるようになると、もう少し今回のビデオでもありました、学生って結構仮説が違っていると失敗だとか、そこで終わってしまっている状況なのですが、もう少し科学というのは柔軟なものだということがわかってくるのではないかな。草の根的な研究発表会なんかを近いところでやるというのが一つの手ではないかなとちょっと僕は思っています。

岡林：確かに、志向倫理を具体的に低コストでというのは、なかなか、そもそも難しいと私も何となく思い込んでいたものですから。ただ、この手のフォルトツリーというのは、私も今回ここで拝見して、ここまで学生さんが書けるものだなとちょっと感心したのですが、フォルトツリーではないにしても、自分の研究の流れと、どこでどういうことが起きそうかということの分析というのを学生さんに演習課題として出すことがあるんですね。例えば、そういうのですと、課題をやっている、その課題をちゃんと返してもらって、それがどのぐらいの深い階層まで考えが至っているかということに基づいてアドバイスをすることができますので、そういう何か、端的に紙でも出せるような課題という形で、なるべく負担軽減ということはあるかと思います。今考えると、逆に言えばそういうのを使ったeラーニングみたいなものが将来的にもしできたら面白いかもしれないと思います。あと、ディスカッションだけはなかなか低コストは難しいと思うんですね。先生まさに仰った通り、逆に言えば、若過ぎると学生さんは変な方向に走ってしまうか、もしくはほとんど何も議論すらしやうとしない。大学院生ぐらいになってくると、さすがに喜んで議論したりするのですが。だから、そもそもこうい

う話題を扱う以前の問題として、どんな話題でも他人と議論をしたいと全然思わないという状態が大学の一番入ったばかりのころはあるかと思いますので、それが何らかの形で学生実習のような流れの中に、1 コマでもいいのでそこを打ち破るようなカリキュラムができればなど、個人的には一応考えております。

Q：あなたがルールを破って、それをとがめられた時、どんな言い訳をしましたか？

- そんなに神経質にならなくても大丈夫だよ。
- なぜそんな面倒なことしなきゃならないの。
- ルール通りやっていたら効率が悪いよ。
- 原則としてだから例外があってもいいよ。
- そんな昔の規則は現状に合わないよ。
- そんな規則あったの？

- 理由とリスクが説明されていない。
- 「部分最善、全体最悪」が理解できない。
- 状況に応じたメンテナンスがされていない。
- 関係者全員に継続的に周知されていない。

ルールを作る人と守る人が異なる。

片倉：ほか、会場からこれだけというのはございますでしょうか。そろそろ時間らしいのですが、もう一つだけよろしいでしょうか。ルールなのですが、昔、ある新聞かな何かコラムに載っていたのですが、ルールというのは破られるものだというのがあります。学生にこれを質問します。「ルールを破って、それをとがめられたとき、どんな言い訳しましたか」と言うと、大体こんな言い訳が返ってくるんですね。私自身もこんな言い訳をしたことがあります。

これを整理すると、こんな感じになるのですが。理由とリスクが説明されていない、それから、部分的に最善だと思っても、実はそれが最悪だったと。最近の企業の不正の多くはこれですね。部分最善なんだけれども、実は最悪だったということなのですが、全てに共通する要因が一つあるんですね。それは、ルールを作る人と守る人が違うからなんです。だから、「ルールを作ってください」と、そういう風に言えないといけないわけなんです。これが一番大切なことかなと思います。予防倫理、既存のルールを学ぶということ、これは絶対必要です。ですけれども、それを学ぶときに、単にこうしちゃいけません、ああしちゃいけませんだけを覚えるのではなくて、なぜそういうルールになったのかというバックグラウンドを理解した上で、新たにルールをつくるという人材を育てるということがやはり高等教育機関の役目であると思います。ですから、そういうルールを提案できる人材を目指すのが研究倫理の最終的に目指すべきところかなと私は思います。つたない司会でしたが、ちょうど時間のようなので、本日はこれで終わりたいと思います。どうも長時間ありがとうございました。